**週刊やすいゆたか88号13年６月13日**

**人類的危機とネオヒューマニズム**長くなりますが、そう何回にも分けられないので残り全部掲載します。

第三回　ネオヒューマニズムの時代としての21世紀　６実践の哲学と行為的直観続き

[](http://www46.atpages.jp/~mzprometheus/philosophia/1659/attachment/taisei)西田の時代も寄生地主制とインド以下の低賃金と言われた厳しい搾取のもとで、急速な独占資本主義の発展がありました。深刻な社会問題があり、社会変革 が迫られていたわけです。  
　また資源と市場を求め、経済的利権を拡大しようとし、東アジアでの覇権を確立しようとしていました。そのため中国の人民の抗日運 動が盛んになり、泥沼の戦争へと突き進んで行ったのです。  
　そういう時局の中で国家的、民族的危機をどう生きるべきかを、どう変革すべきかを哲学しようとし たのです。それが「行為的直観」です。  
　結局、行為的直観にしても、絶対矛盾の自己同一にしても、そういう軍国主義が強まる中で、戦争協力に利用されてしまうところもあり、戦後西田哲学の 戦争責任が問題になります。  
　もちろんその時代の哲学が戦争に動員されるのは避けられませんが、そのことは「行為的直観」や「絶対矛盾の自己同一」という捉え方が間違っているということではありません。  
　「死して生きる」という言葉も、お国のために戦って死んでこそ、時局を真に生きたことになるというように戦争に利用されますが、己を無にしてこそ己 を真に活かすことができるという逆説的な真理も通用する場面は多々あるわけです。

画像は西田の教え子である近衛文麿内閣の成立、大政翼賛会の発足

ハイデッガーも「死の先駆的決意性」を語りました。つまり死を予め決意してこそ、真に生を決断して選び取ることができるわけで、実存の明るみに立つためには有限性の自覚が必要だということは真理です。この言葉がナチスに利用されたからと言って間違っているわけではありません。

**７、歴史的人間と物に成り切る哲学**

 　西田は、絶対無の場所にたって、自己を限定するという「無の自覚的限定」を説きました。つまり歴史や社会の流れの中に身を置いて、そこで一般者の意 志と一つに成って、その時代の課題を担っていくということです。場所をそこに生じる意識内容である有一般とはっきり区別したので、絶対無と表現したわけで す。  
　単なる有に対する無ではなくて、つまり食べ物があるのに対して、食べ物がないというような無ではないということです。そうではなくて、そこに意識経 験が生じる場所としての意識経験の内容から区別された無ですね、いわば意識の底みたいなイメージですが、彼が言いたいのは、自分が置かれている社会や時代 を背負うということだと思います。今、この時代、この社会、この会社、この学校、この地域、この世界を背負っていく意志と一つになるということでしょう。 そのことによって、自分が何を為すべきか、何を作ればいいかが行為的直観として出てくるのです。  
京都大学で「日本文化の問題」を講演する西田

[](http://www46.atpages.jp/~mzprometheus/philosophia/1659/attachment/nihonbunkano)絶対無の場所では、そこに現れてくる意識経験はそのまま自分の世界であり、自分の課題であり、自分の物です。それを西田は一九三八年の京大での講演 『日本文化の問題』で「物となって見、物となって行ふ」「物となって見、物となって考へる」と表現しました。もちろん日本の国家的民族的危機の自覚として 説かれたので『日本文化の問題』になったのです。  
　これを75年後の現在の震災後の危機、日本経済沈没の危機つまり科学技術の先端国の看板が剥げ落ちている企業の国際競争力の危機、国家財政の危機、などに置き換えて考えてみる必要があるでしょう。実際、トンネルの天井が崩落する、国民年金の管理ができない、震災復興の予算が執行できない、深刻な学力 低下が起きている、いじめが横行し、体罰教師がいまだにのさばっている教育現場の危機があります。それらの物になって見、物になって考え、行う必要があり ます。

**８、現代ヒューマニズムの限界**

現代ヒューマニズムは、人間疎外を嘆きました。人間が造りだした生産物、機械、組織、国家、文明が人間から自立し、巨大な物として人間を無力化し、 抑圧しているわけです。この物からの解放、主体性の回復を叫んでいたのです。そして一九六〇年代末の世界的な学生叛乱は、労働力商品製造工場として、人間 物化の元凶の大学解体を叫びましたが、それは欲求不満のガス抜きに終わりました。  
　たしかに主体性回復を叫んだのは正しいのですが、それは物と人間を対極において、物からの解放を説くところに限界があったのです。人間は、元々物に自己を表現し、物になって自己を実現することによってしか自己を解放できないのです。  
　確かに物に成り切ること、物と一つに成って物の中で自己の意志を実現することは、「言うは易く行うは難し」です。しかし働くということはそういうことですし、それが人間の本質なのです。どんなに困難であろうとも、自ら作り出した文明や、人間化された自然を自己自身として認識し、その主体としての責任を果たさなければならないということです。  
　マルクスの疎外論が問題したのは、人間が自己を物にして実現する際に、その組織やシステムによって、主体性や創造性を奪われたり、かえって窮迫する 問題を先ず解決しなければならないということです。それには根本的には私有財産制度をなくさなければなりませんし、資本主義体制をひっくりかえさなければなりません。  
　とはいえ、たとえ集団所有や国有にしても、それを民主的に運営するのはなかなか難しいわけですね。他方たとえ資本主義であっても、できるだけ民主的に運営したり、労働者の創意工夫を生かすことは可能で、働き甲斐のある疎外感の少ない職場をつくることは不可能ではありません。  
　つまり一気に革命的に解決できなくても、現場の労働者の地位や生活を向上させる取り組みはできますし、政治を通してもできることです。そして、同時に自己を物の中に実現し、解放するということも、困難を極めることですが、追求しなければならないわけです。  
　そこでは思い通りにいかない、自分が作ったものに制約されて、悪戦苦闘する疎外がありますが、困難が大きい程やりがいがあるということもあります。

**９、企業にとって製品こそは人間**

今、私は西田哲学をビジネスマンのために役立てる講座を『週刊やすいゆたか』に連載中ですが、企業という絶対無の場所にとって、製品を創造し、サービスを提供するということは、「物になって見、物になって行う」ということなのです。企業自身が組織体という形態の人間ですが、それは個々の従業員の物づくりであり、サービス提供なのです。それは経験としてはまさしく企業の製品であり、サービスなわけです。

「マルちゃん正麺」

[](http://www46.atpages.jp/~mzprometheus/philosophia/1659/attachment/maru)ですからトヨタのカローラに不具合がでたら、トヨタという企業が責任を持って補償しなければなりません。ラーメン屋は、ラーメンの味が勝負です。即席ラーメンは、「正麺」というのがでまして一躍売り上げが伸びたそうですが、製品にこそアイデンティティがあるわけです。  
　ですから「高がラーメン」と言ったらだめですよ。即席ラーメンなのにお店で食べるラーメンと遜色ない食感が出せているということはすごいことです。 それは創意工夫さまざまな叡智や情報がつまっているわけでして、これこそ素晴らしい人間なのです。  
　安藤忠雄という建築家は、彼の打ちっぱなしのコンク リート建築で理解できるのです。  
　西田哲学は経験論ですから、物と経験、事物と行為の区別に固執しません。食堂で出すラーメンはサービスですが、スーパーの即席ラーメンは品物です。しかしそんな区別は大して意味がありません。  
　爆弾は物ですが、爆発させるサービスを売っているのです。ですから物を作るということは、その物が与える感動や効用を作っているのであり、良い経験を作っていると言えます。  
　誤解の無いように願いたいのですが、決して物を経験として捉えることによって、物を否定してしまおうというのではないのです。逆です。物がゆたかな人間経験であることを知ることで、物を作り、物に成るということで、自己を実現できるということを強調しているわけです。  
　ラーメンや建物や乗用車は物を考えないから人間じゃないと反論する人がいますが、ラーメンが単体で人間としての働きを全部するというわけではなくて、人間身体だけではなく、ラーメンも含めて人間存在が構成されているという意味で人間に含めているわけです。

**10、類的存在としての人間とは何か**

確かに一つの物づくりを極めることによって、それ以外の物は作れないので、人間は物作りによって、普遍的な万物を生みだす能力を限定されて、類的本質を否定されてしまうと言えます。その意味で類的本質からの疎外を意味しますが、それはしかし、類的本質を最大限に発揮するための自己限定でもあるので す。  
　だって一人で万能を発揮しようとしても、それぞれの分野で極めるところまで能力を伸ばすことはできません。一つの仕事に人生をかけてこそ、だれにも負けない質を生みだすことができるのです。  
　たとえ自分が作った物でなくても、おいしい食べ物、素晴らしい衣装、素敵な住居、家具、乗物、建物、道路、森や田園風景など、人の手が行き届いていて丹精込めて作られているものを見るとその良さが分かりますし、堪能できます。それらはすべて人間の類的能力の発現ですから、人間全体で類的に享受しているのです。

[](http://www46.atpages.jp/~mzprometheus/philosophia/1659/attachment/yamanaka)

山中伸也氏ノーベル賞受賞記事

そして自分の足が月の地面に降り立ったわけではないのに、人類の月面第一歩を見て、ついに月に行ったと思いますし、山中伸也さんのグループがiPs 細胞を作り出した時も臓器再生への途が開かれたことを人類の達成として、感じることができたわけです。つまり一人一人別々に生きているようでも、人類全体として様々な物を生みだし、それらを人類として享受しているのです。  
　それは同じ人間だからそう思いたいので思っているだけではなくて、言語やさまざまな広い意味のメディアを通して、共同の非有機体的身体としての自然を共有し、共にその中で同じ大きな人間を構成しているからなのです。  
　山中伸也先生はとても謙虚な方で決して自分一人の手柄にされませんが、一つの研究が成功するためには器材の改良・発展が必要ですし、さまざまデータ や関連した研究や設備、スタッフが必要です。家庭の支えや健康を支えた食事が必要で、動植物や空気や水も支えてくれているわけですね。ですから人間の意識 は自然を広い意味の身体にする自然の自己意識でもあるわけです。

**11、何故21世紀はネオヒューマニズムの時代なのか**

20世紀に現代ヒューマニズムが物からの解放を叫んだ時、人間と物を混同し、人間を物化・物象化する高度産業社会、資本主義、近代国家、機械文明に対して、マルクスのフェティシズム論は非常に痛快な批判だったわけです。  
 最も文明が発達した資本主義において、未開人信仰であるフェティシズムが支配している。本当は、みんな超越的な神なんか信じていないのであって、商品、貨幣、資本といった物が人間関係を支配し、君臨していて、それらをみんな神として崇めているというわけです。

人間の労働が価値なのにそれは、物の属性とみなされ、商品価値として倒錯され、商品関係が人間関係に取って代わっているわけです。これは物と人間の倒錯的な混同だという批判です。これは人と物を対極的に捉えるわけで、人間は主体であって、物ではない、物の支配＝人間の対象化は人間の死であるということですね。

しかし、この議論は一九六〇年代末の学生叛乱、「五月革命」の挫折で破綻してしまったのです。確かに主体性の回復は大切で、物でしかない自己意識のないロボットのような状態の人間では駄目です。その意味で人間性の回復は叫び続ける必要はありますが、現代ヒューマニズムは、物化を批判するあまり、物と人間を対極化してしまったので、物の中に自己を実現し、解放するという本来のヒューマニズムを見失ってしまっていたわけです。

だから構造主義が、主体としての人間の死を宣告するとヒューマニズムは衰退してしまったのです。マルクス主義や実存主義の衰退と運命を共にしたわけですね。

コードやシステムの支配が語られ、意識やイデオロギーが生まれる構造の分析がなされました。そしてそういうシステムに絡み取られるのが耐えられないなら、砂漠や精神病院への逃亡しかないということで、フランス現代思想は、ゴダール監督の『狂いピエロ』を生んだわけです。

ゴダール監督『気狂いピエロ』

しかしそういうコードやシステムを含めて人間が存在しているのであって、それらをすべて引き受けて、その主体となる以外に人間として生き抜く道は残されていないのです。

たしかに人間はあまりにすごいものを生みだし過ぎました。それはピラミッドのような巨大建造物がそうですし、それに象徴される巨大組織としての古代王権がそうです。治山治水に人民を組織して文明を築きました。鉄器や騎馬の使用が戦争機械としての軍団を形成し、世界帝国の形成やそれに伴う大殺戮を可能にしました。モンゴルの征服で、耕地にされていた森林を再生して地球を寒冷化させるほどの人口減少が起こったのです。

近代の産業革命以降、道路、鉄道、乗用車、飛行機、工業都市の建設、通信の発達などで巨大な近代国家や大企業が生まれ、組織体としての人間に個人は対抗できなくなって、無力な大衆が生まれました。

膨大な工業製品を生産しては、それらを流通させ消費していく、経済システムがつくられ、そのもとで、非有機的身体である自然は人間環境として開発されすぎて、劣化し、環境危機を生じています。  
 また近代国家は、国民経済や独占資本の矛盾を調整し、彼らの権益を守るために軍事力を強化し、恐ろしい毒ガス兵器や核兵器など人類を絶滅させかねない最終兵器を作ったのです。しかし技術の発展は地球を一つの村の如くしましたから、もはや長距離ミサイルや核兵器の独占による覇権も神話化しつつあるわけです。  
 こうして造りだされた文明やその下でのハイテク機器や官僚機構、企業組織などは個々人にはどうしようもない他者としてとか捉えられなくなり、それらを含めて人間を捉え返して、自らの夢を実現させ、解放していくようなイメージを抱くことができにくくなったようです。つまり人間が作り出した物が人間の他者として、人間を支配し、人間の首を絞める人間の自己疎外に苦しんでいるわけです。

しかし元々人間の自己実現として人間が物化・対象化した人間自身の姿だとして、捉え返し、自らの人間の自己疎外を振り返って、その原因や解決方法を探れば、幾らでも知恵は湧いてきますし、解決方法は見つかります。そして巨大で圧倒的に見える科学技術とそれが作り出した事物も、人間の知の連続であり、意識経験に過ぎないわけですから、それを組み替え、リスクを軽減し、無用なものを有用にし、本当に危険なものは取り除けばいいわけです。  
 我々はつい自己の身体とそこに宿る人格だけが人間だと考え、無力で絶望的だと考えがちですが、実際には最先端機器を駆使して、生産や消費や移動を行い、全世界に発信し、全世界から情報を受信しているのです。単に個人としてだけでなく、組織体として動いたり、さまざまな創意工夫で世界に働きかけることもできます。  
 最近の東欧やアラブ、中国等の民主化運動や変革運動は、ＷＥＢなどのニューメディアを使った非組織的な市民の呼びかけに呼応したものです。まだ21世紀に相応しい組織体のあり方を見いだせていないので、限界がありますが、早晩そういう問題も試行錯誤の中で解決していくでしょう。

ですから、人間は自分たちが生みだした事物を含めて自己自身として捉え返す、自覚（自己意識）の立場に立った時、「物となって見、物となって考え」「物となって見、物となって行う」ことができるので、世界をわがものに獲得するネオヒューマニズムの思想が人々の魂を捉えることができるようになるのです。

それはもちろんそれほど遠い将来であっては、危機の深刻化を克服できなくなるので困ります。でもそう簡単でもなさそうですから、私の目の黒いうちというのは困難かもしれませんが、21世紀の前半にはドリーム・カム・ツル―といきたいですね。